

学び合う学級を目指した私の実践

～国語・算数、学級活動を中心として～

桐生市立境野小学校 小島 理宏

1. はじめに

現行の学習指導要領のねらいは、児童に「生きる力」をはぐくむことである。そのため各学校においては、自ら学び自ら考える力の育成、基礎的・基本的な内容の確実な定着、個性を生かす教育の充実を目指して日々努力を続けているところである。

また、平成20年3月に告示された新学習指導要領でも、教育基本法改正等で明確となった教育の理念を踏まえ「生きる力」を育成すること知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること道徳教育や体育などの充実により、豊かな心と健やかな体を育成することが基本的なねらいとして強調されている。

そこで、本実践では、学習活動を見直し、各教科における学習意欲の向上を目指すと同時に、各教科で求められている思考力・判断力・表現力の育成を図る手だてとして学び合いに焦点をおくこととした。個々の考えや思いを交流させる場を工夫することで、互いの発想や考えのよさに気付き、活気にあふれる授業展開が期待できると考えたからである。学び合いを通してそれぞれが考えを深めるきっかけを得ることができれば、授業での充実感は増し、学習全体で意欲が高まるのではないかと考えた。また、認め合

たり補い合ったりすることで自己を肯定する自信や有用感が生まれ、学級集団としてよりよいものを求め共有する雰囲気生まれることも予想された。

学び合う学級作りのためには、様々な教科や領域で繰り返し交流場面を設定していく必要がある。しかし、それ以上に大切となるのは、小グループの話し合いのスキルを磨いたり、学級活動で司会や進行を経験させたりしながら、個々の思いを十分に引き出す術を身に付けさせていくことであろう。話し合いの技能に習熟していれば、円滑な意見交換を実現でき、児童主体の有意義な学びの場が約束される。

最後に、教科や学級活動を支えるものとして学級の雰囲気を構成するその他の要因を考えていきたい。朝の会や休み時間、学校行事などを通して子ども達は大きく成長する。そうした活動



図1 研究のイメージ

の中で個々のよさを十分に発揮させることは児童一人一人が教科の学習の中で考えを積極的に伝え合うことに直結していく。従って、学級に温かな雰囲気を生み出すための様々な手だてを教師が意図して導入し、和やかで節度ある学級集団作りを目指して、計画的かつ継続的に取り組むことが大切であると考えた。

以上のことから私は、学校生活での学び合いに主眼をおいて、実践を進めることとした。そして、学び合いや交流を取り入れた「各教科の学習指導」、話し合いの技能を高める「学級活動」、温かな雰囲気を作る「その他の活動」の3つを学び合いを支えるものとして位置づけ、それぞれに手だてを工夫することとした(図1)。なお、本実践は、担任している小学校2年生の学級(在籍児童23名)で行ったものである。

2. 学び合いを具体的な「合い言葉」にして

学び合う学級を目指す時、子ども達にとって大切となるのは「各教科の学習」「学級活動」「その他の活動」を常に学びの場として意識できるようにすることである。そのため教師側は、学び合うことを目指した学級目標を児童自身の願いをもとに明確に設定し、それを浸透させる必要があると考えた。そこで、年度当初の学級開きにあたり、話し合いの時間をできるだけ十分にやり、児童の願いに教師の思いを融合させる形で学級目標をまとめた。その際、学級目標が、分かりやすく覚えやすいものになるよう配慮し、合い言葉として全員が意識できることを心掛けた(写真1)。

掲示した本学級の合い言葉を下記に示した。内は教師側の願いである。なお、本年は学級だよりも『たからじま』とネーミングし、学級の合い言葉との関連を図った。

「た」すけ合おう
協力する心が育まれるように
「か」んがえよう
考える楽しさを感じられるように
「ら」ララ・・・楽しく歌おう
伸び伸び表現する喜びを味わえるように
「じ」ぶんや友だちのよさをみつけよう
個性を伸ばせるように
「ま」いにち元気にあそぼう
体力が向上するように



写真1 学級に掲示した合い言葉

3. 教科指導における学び合い(小学校2年生での実践)

国語科における実践

国語科で培う言語能力は、いわゆるPISA的な読解力の基盤となるものである。そのためには、意見交換を通して自己の読み取りを深め、言葉や語句を使って思いを文にし、相手意識をもって話したり聞いたりすることが必要となる。

「読む」



写真2 音読発表会に向けて練習

日頃の説明文や物語文の指導では、教科書やノート、プリントなどへの書き込みをしながら、自分自身の読み取りを文章化したり気付きや付け足し文を加えたりする活動を繰り返した。学び合いの基盤となる活動であると考えたからである。そして、机間指導を通してよい書き込みを認め、全体に広げたいという本人の意欲を高めることを目指してきた。音読に対しては、繰り返し読んで理解を深

めるための工夫として様々な形態を取入れてきた。丸読み、隣同士の交換読み、連れ（リーダー）読み、などである。

『ふきのとう』のグループ音読発表会では、役割読みを取り入れ、聞き手を意識した発表の場として位置付けた（写真2）。その際、よりよい発表を目指して班の中で話し合ったり班同士で互いに聞き合ったりアドバイスを送ったりする活動を通して、意欲を高めることとした。発表会では、一つの班が発表する度に感想のやりとりをする時間を十分に設け、認め合う雰囲気を生み出せるよう努めた。なお、音読発表会に向けては、家庭学習の充実も意識し、音読カードを毎日必ず取り組めるような形にしたり親子での丸読みを取り入れたりとすることで意欲付けを図った。

「書く」

子ども達の文章を書く力には大きな差がある。そこで、その差を感じさせず、個々の意欲を高める課題を考えた。読書紹介カードの掲示である。読書には個々の興味や関心が如実に反映されるため、読書内容はまさに多種多様である。従って、内容の紹介も一様でなく、工夫を入れる余地が大きい。個々の児童が、自分の読んだ本を自信をもって掲示することができれば、文章を書く力の向上と共に自他の個性やよさを感じるよい機会にもなると考えられた。図書室に毎週必ず1度は通えるよう時間割に組み込み、月に一冊のペースで本を紹介し合うこととした。用紙には絵を入れる場も用意し、児童の意欲が高まるよう配慮した。結果、ほとんどの児童が文章を少しでも多く書こうと努力するようになり、他の児童の文から学ぶ様子も見られるようになった。

また、詩（短文）をなぞなぞ形式で作成し、問題や答えを発表し合ったり、掲示した詩の中から一番お気に入りのものに付箋をつけて認め合ったりしながら互いの文のよさに触れる活動を行った。

「話す・聞く」

日頃の授業でのやりとりを充実させることはもとより、人前での発表に重点をおいた。特に朝の会での「スピーチ」の時間と関連させ、自分の好きな本やテレビといった気軽な題材を中心に自分の思いを自由に話せるよう支援を繰り返した。多くの児童が自信をもって話せるようになった頃を見計らい、『あったらいいなこんなもの』の単元に取り組んだ。自分自身が考案したあったらいいなと思うものを自由に発表する内容である。その際、絵を描いたり絵に説明の書き込みをしたりすることも促し、原稿を読むのではなく、相手に向けて分かりやすく話すことを心掛けさせた。また、発表に対する質疑応答も大切にし、説明の足りない部分を聞き出す質問を大いに褒めたり整然とした受け答えができる児童を模範としたりしながら自信をつけさせた。

「読書」に関連して

単元に関連した本の紹介を取り入れた。同じ作者の著書を紹介することでより深く作者を理解したり、同じような主人公の作品を楽しく紹介したりすることで学級の文化を豊かにする十分な情報交換が可能となると考えたからである。

算数科における実践

本校の校内研修は、現在、「学ぶ楽しさを知り、進んで学習に取り組む児童の育成」を目指している。その中でも特に算数科に焦点を当て、「意欲を引き出し、思考を促す算数的活動の充実」を副題として実践を進めている。自力解決場面での支援や、考えを表す場面の意図的な導入、考えを交流しながら学び合う場面の設定などを工夫し、考える過程を大切にしていくことで、学ぶ楽しさにつなげることを意識して研修を進めているところである。研修主任という立場もあり、この一年は算数において手だてを工夫する必然性もあった。

本学年において、力を入れた手だては次の三つである。

考えを交流する場面（学び合う場面）を意識して取り入れること

学び合いの基本は考えを伝え合うことである。学級全体の場でははっきりと自分の考えを示すことができれば、互いの考えのよさに触れることができ、個々に学びを深めていくことが期待できる。しかし、学年の発達段階や学級の実態を考察すると、そうしたはっきりとした発言ができる児童は一部に限られてしまいがちであった。そこで、隣同士で説明し合う時間を設けたり、学習班を4人とし、小さな集団の中で互いに考えを説明し合ったりする学習訓練を繰り返し取り入れた。そして、自信をもって考えを伝えられるよう二人で発表させたり班の力を合わせて発表させたりしながら、少しずつ発表への意欲を高めてきた。同時に、聞く側への指導も繰り返し、人の考えをしっかりと聞き、自分の考えと比べることを心掛けさせてきた。その結果、理解に時間がかかる児童は丁寧に説明してもらうことで新たな意欲を得ることができ、理解の速い児童は、分かりやすく説明することで自分の考えをより確かなものにするのができた。

ノート指導の充実を図ること

自力解決場面でそれぞれが自分なりの解決を絵や図、式などに表すことに主眼を置いた。また、考えの交流を通して分かったことや新たな気づきをノートに追加して書き込んでいく時間も確保し、繰り返し習慣付けを行った。学び合いを支える基盤として自他の考えを書き込み、粘り強く考える習慣は必ず必要なこととなる。

自力解決や思考を支えるための計算トレーニングの充実

日頃の児童の算数授業の様子から、正しく計算する力や計算にかかる時間の個人差が大きいことが課題として見えてきた。基本的なたし算ひき算の力をつけることも勿論であるが、2年生においては、かけ算九九をしっかりと定着させることで問題解決への意欲を高めていこうと考えた。そこで、『かけ算合格カード』を工夫し、繰り返し九九を聞き合い、いろいろな人から合格をもらえるよう配慮した。親と子、教師と児童、という固定した形でカードを活用するだけでなく、児童同士



図2 かけ算合格カード

で交流することでも刺激し合えるのではないかと考えた（図2）。また、九九カードを使った様々な遊び方も教え、より多く児童がカードを活用し、積極的に交流することを目指した。

生活科における実践

生活科では、町探検や秋祭りの活動を中心に、グループ学習を組んだ。共にグループピングにおいては、興味・関心を大きな柱としながら協力し合えることを考慮し、人員構成に細心の注意を払った。活動にあたっては、十分に話し合えるような時間を確保し、共に協力し合い助け合いながら試行錯誤できるような展開を試みた。



写真3 インタビューの練習

町探検では、お店訪問の計画を立てる段階で、他のグループがどのようなインタビュー計画を立てているか情報交換をさせた。特に、質問の内容をより充実させるために、互いに詳細な内容を発表させたり、掲示したりして、他のグループのよさを取り入れられるような配慮をした。また、早く準備が終わったグループ同士で、お店役とインタビュー役に分かれてのりハーサルをさせ、共によさや改善点をアドバイスできるようにした（写真3）。交流する過程で、

互いのよさや足りない部分に気付くことは、主体的な学びを進める原動力の一つとなった。

秋祭りでは、自分がやってみたいお店をつくる活動を中心に据えた。子どもたちは、思い思いに意欲的な活動を進めていたが、視野が狭く、自分のグループの中のみ話し合いに終始しがちであった。そのため、リーダー的な存在となる児童の意見に流されてしまい、新たな気付きが足りないように思われた。そこで、他のグループの活動を交代で見て回る時間を設定した。他のグループの作業を見て回ったり質問をしたりすることで、自分のお店作りに足りないものを一人1つ探り出すようにさせたことで新たな活動目標ができ、さらなる活気が生まれた(写真4)。



写真4 他のグループから学ぶ様子

他の教科における実践

音楽科では、グループでのリズム演奏会を行った。学習グループごとに創意工夫し、リズム打ちをしたり楽器を選んだりする過程を通して、得意な子に気軽に教えてもらったり、遅れがちな子を丁寧に面倒を見てあげたりする姿が多く見られるようになった。ピアノなどの指遣いに苦労していた児童も教え合いの中で少しずつ上達する様子が見られた。終末では、発表会を行い、感想を交換することで個々のグループの演奏のよさに互いに触れることができた。発表後の子どもたちの笑顔が特に印象的であり、充実感が感じられた。

図工では、絵や工作の作成途中で、他の児童の様子を見合う時間を故意に取り入れることとした。他の児童の取り組みに触れることで新たな気づきや工夫が生まれることを期待したものである。2年生の段階では、具体的なアイデアが生み出せずに作業が滞りがちな児童も見られるが、他の児童の様子を観察し、模倣することから活動に自信がもてるようになる場面も多々あった。他の児童の工夫を自分の中にも生かせないかと考えてみることは、鑑賞力の向上にもつながり、他の児童の個性を認める第一歩ともなっていたように思われる。

体育科では、運動会の表現活動で、学び合いを多く取り入れた。今秋の運動会は、1・2年生合同での表現運動として沖縄地方の民舞『エイサー』に取り組んだ。本番までの過程では、まずは、2年生が踊りに慣れ、技能的に上手に踊れるようにしようという目標を子ども達と共有した。



写真5 表現「エイサー」の上達

本学級においても、リズム感に優れた児童が中心となり張り切って仲間に手本を示す様子がやがて見られるようになった。上手になってきた児童には、さらに細かな手足の動きを授業外の時間に教えてやる形にしたところ、休み時間や放課後にも特別練習を行う児童の姿が徐々に増えていった。本番が近づくにつれ、練習に励む児童の数が自然と増え、動きについて共にアドバイスを送り合う様子も見受けられた。先に上達した児童をリーダーとしてクラス全体に踊りの輪が広がり、20分休みや昼休みに自発的にCDをかけて踊る姿が見られるようになった(写真5)。上達した児童には、「分かりやすく、やさしく、丁寧に」教えてあげることがめあてとさせていたが、教える中で自身の踊りを修正し、よりよいお手本となるよう向上を目指す姿が見られるようになり、予想以上の相乗効果があった。また、互いに見合う時

間を設けたり録画したビデオを見たりしながら意見交換する場も時折取り入れた。結果として、踊りの得意な児童の主導で徐々に学び合いが広がっていき、効果が表れた具体的な例となった。余談であるが、他の2年生のクラスやそれを見ていた1年生までが一緒になって休み時間に踊るようになったことも付け加えておきたいと思う。

4. 学級活動において

話し合い活動の手順を身に付ける

学び合いを支える基礎的な力の一つとして、話し合いの技能が挙げられる。小グループの話し合いでも全体の場での交流を見ても、日頃の話す力や聞く力が基盤になっていることは明白である。また、グループでの話し合いの場を見ていると進行役になる子どもの心配りや話し合いを進める手順の理解等が大きく話し合いを左右する結果となっていた。低学年では経験も乏しいため、個人差も大きかった。



写真6 輪番で司会

そこで、本年は、学級活動の話し合いにおいて、司会役を全員が輪番で経験できるよう配慮した(写真6)。学級の中で、周りの児童や教師の助けを借りながら話し合いを進行する経験をもつことは自信や意欲を高める上でとりわけ重要なことだと考えたからである。その際、1学期は上手な子どもに見本も示してもらい、2学期からは、班毎の適任者を自薦させる形をとった。そして、2学期後半から3学期にかけては未経験者に経験を積ませるといった段階を踏んでの実践を進めた。

学級活動での話し合いマニュアルを(図3)に示した。しかし、このマニュアルはあ

学級会の進め方 (司会者の言葉の例) 2年生用

<p><話し合い活動のながれ></p> <p>1. はじめの言葉 (司会・係のじこしようかい)</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>自分で言っても 司会が言ってもよい</p> </div> <p>2. ふんい気づくり</p> <p>3. ぎだいのたしかめ (司会)</p> <p>4. ていあん理由のせつ明 (ていあん者)</p> <p style="text-align: right;">ていあん者→</p> <p>5. 話し合いの進め方 (ふく司会)</p>	<div style="text-align: right;">  </div> <p>○これから第()回学級会をはじめます。</p> <p>今日の話し合いの計画委員会は、司会の私()、ふく司会は()、黒板書記は()、ノート書記は()です。よろしくおねがいます。</p> <p>はじめての計画いいんですので、みなさんたくさんの意見を言ってくたさしてください。今日の話し合いの全体のめあては「 」です。みなさんごきょう方おねがいます。</p> <p>○さいしょにみんなの気持ちを一つにするためにクラスの歌をうたいましょう。(音楽係さんおねがいます。)</p> <p>○今日は、「 」について話し合います。</p> <p>○なぜ話し合ってほしいのかの理由をていあん者の()さん、おねがいます。</p> <p>● 今日の、ぎだいを出したわけは「 」だからです。</p> <p>○ていあん理由について、しつ問はありますか。</p> <p>○それでは、今日の話し合いに入ります。最初に「 」について、()分話し合い、その後「 」について、みんなで決めたいと思います。</p> <p>*黒板記録が、話し合う内容を書いた紙を黒板にはる。(手書きでもよい)</p> <p>*アンケート結果やせつ明、計画委員からはこれまでのながれのせつ明なども行う。</p>
--	--

図3 2の2「話し合いマニュアル」

くまでも基本的な流れを意識するためのものであり、臨機応変な対応が必要になることが間々あった。従って、言葉を繰り返したり、聞き返したり、再度説明してもらったりする場面では教師の助言が多くなる現実があった。現在は、少しずつ上達している。

グループの話し合いを取り入れた時には、人数は少なくとも司会役の児童を中心に、しっかり手を挙げて発言するよう基本的な約束をあらかじめ決めておいた。また、司会者は班の全員から一通り意見を聞き出し、少数派の声にも積極的に耳を傾けるような配慮を心掛けさせた。話し合いのまとめでは、全員が協力してグループの総意として意見を伝えるように補い合って説明する練習を繰り返した。

意見ポストの設置から

本学級では、児童の思いや願いを知るための手立てとして意見ポストを活用している。意見ポストの横にはいつでも誰でも自由に書き込みができるよう用紙を準備して置いている。この用紙には、投函した児童が緊急性や全体性などを計画委員に伝えられる欄を設け、計画委員ができるだけ簡単に議題を絞れるよう配慮した(図4)。自らの思いが実現できる場をもつことは、児童の学校生活や話し合い、学び合いの意欲を高めることにつながる。そして、納得のいく話し合いを繰り返すことができれば、各教科における意見交流も深まりが期待できると考えた。

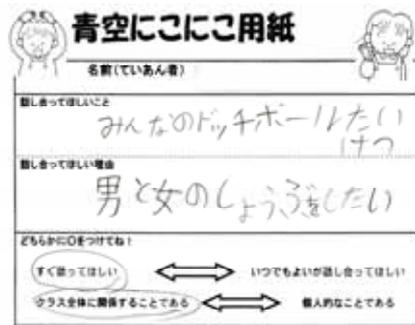


図4 学級活動の意見用紙

集会活動の工夫

年間計画に沿って、その時期に適切な話し合い活動を取り入れると同時に、集会的行事をできるだけ多く取り入れることを試みた。特に、お楽しみ会やお別れ会などは児童の思いを大切に、児童の願いを実現できるようプログラムをまず個々で考えさせた。集会のプログラムを決定する段階では、全員の思いが明確になるよう小グループでの意見交換をし、そのアイデアをグループ毎に全体の場に発表することで、より多くの意見を吸い上げられると考えた。実行するレク係との連携や進行役の児童との打ち合わせを綿密に行うことで、当日の運営を円滑にし、実行する楽しさや満足感は十分な話し合いの場から生まれるという実感をもたせることにした。話し合いがよりよいものを生み出すという実感は学校生活や教科学習への意欲につながっていった。

5. 学校生活全般にかかわって

学級通信『たからじま』

本年は、児童の活躍の姿をできるだけ多く掲載することを心掛けた。個々の児童のよさが発揮された場面を多く取り上げることで、保護者からも励ましの声が得られ、また児童が自分自身に自信をもち、個性の伸長が図れると考えたからである。通信を通して互いのよさを知り、共によさを学び合うことは、向上心あふれる集団を生み出す第一歩とも考えた。なお、学級だよりの題名は、学級目標と関連づけ、一人一人のよさ(宝)をみつけることを日々意識させるようにした。

日記指導

児童が個々の個性を発揮し、楽しく取り組みながら言葉の力をつけていく手立てとして本年は日記指導を取り入れた。毎週土・日の宿題として取り入れ、文を書くことへの抵抗を少しずつ減らせるようにしたいと考えたからである。自分の考えを明確にしたり、順序立てて書くことができるようになれば、自力解決という学び合いの基盤

となる部分で児童の思いをより確かなものにできると感じて取り組んだ。手本となる児童の日記は、学級だよりも紹介することで、書く意欲や技能を高めていった。

個性を発揮させる会社（同好会）活動

本学級では、毎日やる分担した仕事を「係」と呼び、興味・関心が一致するもの同士の自発的な活動を「会社」と呼んで区別している。基本的に「会社」は自由で不定期な活動といえ、その分だけ児童の興味・関心を強く惹きつける。会社は遊びや特技、趣味の延長上にあるともいえるので、個性発揮の場として定着している。現在生まれている会社は『新聞会社』『なかよし（裁判）会社』『長なわ会社』などである。

『新聞会社』の新聞作りでは、1枚の新聞を役割分担して作成することで、協力する楽しさを味わい、互いの個性やよさに気付くことができるのではないかと考えて支援した。見出しを書くレタリングの得意な児童、記事を書くことが好きな児童、文字をきれいに書くことに喜びを見いだす児童、挿絵や4コマ漫画などを書きたい児童等各々の意欲を生かして一つの新聞にまとめ上げる方法を教えることで一つのチームとして互いに声を掛け合ったり読み合ったりする雰囲気が生まれた。そして、発行第1号への支援を丁寧に行った結果、まとめ方のコツをつかみ、第2号からは自発的にまとめようとする意欲が高まった（図5）。結果として、これも無理のない自然な学び合いの形となった。



図5 新聞会社作成の第1号新聞

長なわ大会

本校の学校行事の一つとして『長なわ大会』がある。各クラスで練習に励み、5分間に跳べた回数合計を競うものである。一年を見通す中でこの行事は、目標に向けて全員で一丸となるために最もふさわしいものであると考えた。そこで、本学級では、2学期の半ばより目標をもって練習に取り組み始めた。現在、目標回数（5分間で400回）を立て、その実現のために跳び方や跳ぶ順番などを工夫しているところである。長なわにおいてもやはり上手な子の跳び方の様子をよく見ることが大切である。そして、得意な子は苦手な子に優しく適切にアドバイスを送ったり休み時間の練習に付き合ったりしながら徐々に技能を高めていくことが望ましい。互いに励まし合いながら、本番で目標を達成する喜びを味わえるよう跳び手と回し手の選出も子ども同士で考えさせながら進めていきたいと考えている。

『境野小フェスティバル』

もう一つの特徴ある学校行事として3学期の『境野小フェスティバル』がある。「1分間鉛筆立て」などのランキングを競う種目の他に、児童が個々のよさを発揮する「なんでも名人」のコーナーがある。近年は、ピアノ演奏やダンス発表などに加え、落語、どじょうすくい、コマ回し、などの多彩な特技の発表が増えている。

本年は、学級単位での挑戦をしたいという児童の声が1学期から出ており、アイデアを募集しているところである。皆で知恵を寄せ合い楽しく準備や発表ができれば、学級における学び合いの絶好の機会になることが期待できる。また、一緒に過ごした一年間のまとめとして思い出に残る時間が過ごせるものと考えている。一人一人のよさを生かせる場を学級活動での話し合いを通して導き出すようにしたい。

6. まとめと今後の課題

QUアンケートの結果から

学級の変容

本校では、人権教育の一環として、QUアンケートを毎年実施している。学級の変容をQUアンケートで比較してみた(5月と12月に実施)。アンケートの結果、自分自身は人から認められていないと感じる児童や学級に対して不満を感じている児童が少しずつ減ってきていることがわかった。それに伴い、学校生活への意欲が増してきている。(図6)

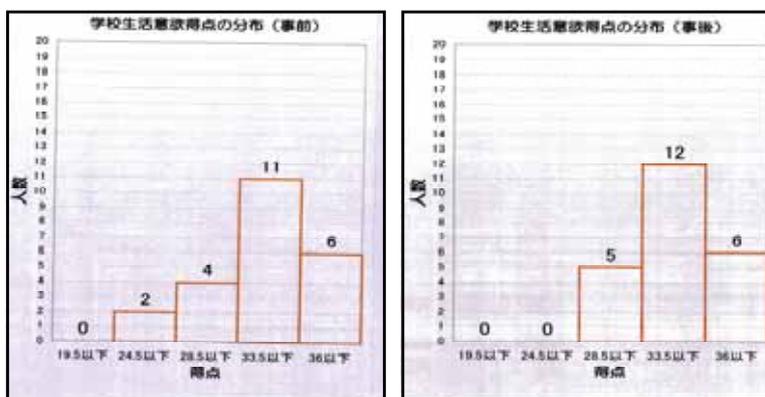


図6 QUアンケート 学級の変容

A男の変容

A男は、1年生の頃より、他の児童に対する暴力や言葉によるトラブルが多く、指導を多く必要としてきた。指導に対しても、自分の非を認めることができず、素直に反省できない未熟さがあった。そのため、4月の段階から他の児童の前で注意をすることで自尊心を傷付けないように配慮をすると同時に、常に本人の心に問いかける形での支援を繰り返してきた。授業においても、他の児童と同じように意見を丁寧に聞いてやったり、授業での意見のよさや頑張り

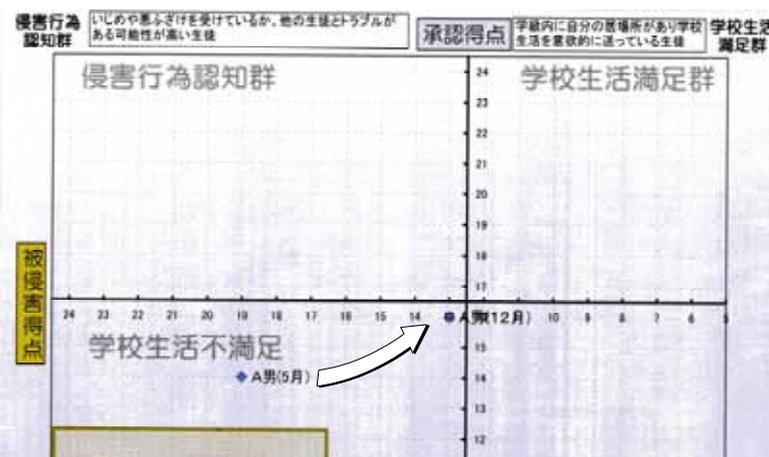


図7 QUアンケート A男の変容

業での意見のよさや頑張りや皆で認めるように意識してきた児童である。図より、学級に対する不満は少しずつ解消されていることが分かる(図7)。不満が解消されれば、やがて学習意欲の高まりにもつながっていくであろう。本研究で、学び合い、認め合いを目指してきた成果がA男の変容に表れたと考えている。

実践の成果と課題

本実践を通しての成果の一つとして、まず児童の授業への取り組みが積極的になったことが挙げられる。隣の席同士やグループ内での交流が増え、自分の考えを伝えようとする姿勢が見られるようになった。特に、周りの児童のやっていることに真剣に目を向けるようになったり、発言をよく聞こうとしたりするようになったことは、基本的な学習習慣を確立する上で意義のあることであった。

また、授業での交流が盛んになるよう、話し合いのスキルを身に付ける指導を繰り返したことも少しずつではあるが、実を結んでいるようである。話し合いの進め方や発言の仕方を学級の児童の多くが身に付けていれば、教科の学習においても、より深い考えやより多様な考えに主体的に触れるよいきっかけとなる。2年生という発達段

階では、まだまだ、様々な意見をまとめ、生かす段階には至らないことが多いが、他の児童の言わんとすることを自分なりに理解しようと努力する姿があった。

さらに、学校生活を楽しいと感じている児童が増えつつあることにも注目したい。学校生活の大部分は授業であるが、授業以外の部分でも、様々な学び合い、交流の工夫をすることで、よさを発揮する気持ちよさや認められる喜びを味わっているのであらう。

一方、課題も残った。学び合う過程で、多くの時間を必要とする点である。できれば、各教科の学習の中で毎時間十分に交流させることが望ましい。しかし、45分間という限られた時間の中では、自力解決にも時間を要し、学び合いの部分が縮小されてしまう場合がある。また、いつも同じような形では児童も新鮮さを感じることができず、惰性に陥りがちになる。各教科の特性や単元、内容に合わせて有効な形を見極め、楽しみながら学び合えるような手立てを今後も工夫する必要があると感じた。

残された数ヶ月ではあるが、児童主体の学ぶ喜びと児童の自信やよさを引き出す試みを今後も続けていこうと考えている。そして、生きる力を支える確かな学力や個性の伸長、さらには生き生きとした活気ある学校生活の中で育まれる心身の健康を目指して努力をしていきたいと思いを新たにしている。